５

立青は今井由紀に会ってから数週間後、軟禁状態になっていた。ある研究機関に連れて来られていた。待遇は最上級で広い個室とシェフまでついていた。暮らしに不自由は無かったが、毎日毎日モルモットのように調べられていた。集中的に脳内を研究されていた。また未来の事も聞き出されそうになっていた。しかし“宇宙人の彼女”までは連れて来られなかったので立青はただの岡島靖に戻っていた。

「岡島さんに特別な能力があるようには見えないのですが」と主任研究員。

「しかし、現実に未来を言い当てて某政治家や企業経営者などからも絶賛の手記も出ていたのだが・・・」と、所長。

「一つの可能性としては、凡人の演技をしてると言う事です」

「でも自白促進剤を投与したはずだが」

「そうなんですが、体質によっては余り効かない事例もありますし」

「かと言って薬を強くし過ぎて体へのダメージがかかり、まずい事になると厄介だしなあ」

「とにかく脳細胞の働き方も常人と何ら変わりないですし、脳波も特別変わってはいませんでしたので・・・」と、主任研究員も首を傾げていた。

「普通の好青年としか言いようが無いという事だな」と、所長。

「あまり長期間ここに置いておく訳にもいかないですし、そろそろ移送しませんと」

「そうだな、ここでの記憶を消してもとの生活に戻してやる時期に来てるようだな」

「残念です、国家機密に属するような人間を発見したかと思ったのですが・・・」

「世界各国も超能力者を研究したり、協力してもらったりしているのだがなあ」

「占い師、立青はまやかしだったのでしょうか」

「週刊誌が作り上げた虚構の占い師だったのかもしれないな」

「あと考えられるのは、一時期特別な才能が発揮されると言う事もあることです。１５で神童、二十歳過ぎればただの人というやつです」

「なるほど、人の能力も不思議なものだからな」

結局、２人は実績が上げられなくて悔しい面持ちでお互いの顔を見た。そしてシェフに岡島さんの帰りの特別食を指示した。

６

週刊誌では立青が２週間もの間、行方不明だったので騒ぎ出していた。

「預言者、立青失踪」

「現代の拉致事件か」と言った見出しが躍っていた。

そこへ何事も無かったかのように、ひょっこりと姿を現したものだから逆に呆気にとられてしまった。記者がインタビューしても答えがあやふやで、自分でも良く分からないと言っている状態に困惑した。何かを隠してるようにもとれるし、またその間の記憶がすっぽり抜け落ちているとも話していた。

　自宅に戻った靖は“彼女”の事が気になっていた。２週間もの間、突然の留守にしてしまったようなのでもう何処かへ行ってしまったかと思っていた。ところが彼女はまだ居てくれた。ただ大分弱ってるように見えた。あれだけの大食漢なのによく生き延びていてくれたと思った。室内を見回すと大分プラスチック製品がなくなってた。それらでエネルギーを補給していたのだろう。済まない事をしてしまったと思ったが、自分ではどうしようもなかった。

“帰ってきたのね”と、力なく言った。

「うん、自分はどうも２週間もの間、留守にしてしまったようで・・・」と、記者にそう聞いたことから判断して喋った。

“ゴメンナサイね。かなり容器やケースを食べてしまったわ”

「いいんだよ、でもよくここにいてくれたね、ありがとう。直ぐに買出しに行ってくるから待っててくれる」と言って２０分ほどして靖はコンビニの袋を２つ提げて帰って来た。

「お待たせ、どうぞ一杯食べてくれる。自分は弁当１つあればいいから」

“うわーっ、ありがと！頂くわ、久し振りにお腹一杯食べられそう・・・”と言って彼女は子供みたいにはしゃいでいた。

「いくらでも食べていいんだよ。君のお陰でお金が稼げてるのだし、遠慮する事はないよ」

“・・・・・”

彼女は夢中で食べていた。エネルギーが底をつきそうだったのだろう。あと１日２日遅かったら彼女はどうなっていたのだろう。何処かへ行ってしまっていたかもしれない。

　自分も腹ごしらえをすると、今後の事を考え始めた。このまま占い師としてやって行くのもアリかも知れないが、もう一勝負したいとも思い始めていたのだった。今ある資金を使って何かもっと大きな事をしたいと思った。

　そこへ“彼女”の言葉がやって来た。

“株をしてみれば？”と。

「うーん・・・」

“世の中を飛び交ってる情報を整理して使えば、占いみたいに出来るはずだわ”

「でも、マネーゲームは性に合わないよ」

“そんなに否定的に考えなくてもいいんじゃない。そのお金を世の中に還元すればいいと思うけれど”

「君は変わって来たね。以前は僕たちのことをカネに執着してるような言い方をしていたけれども」

“そうかもしれないわね。最近の色んな人達の情報を聞いてるうちに変わってきたのかも”

「まあ、君という強い味方が付いていてくれれば鬼に金棒だよね・・・」

“行けるところまで行ってみましょうよ。靖さんが成功者になったって悪くないのだし”

「ありがとう、でも何でそこまでこんな自分を面倒みてくれるの？前から聞いてみたかったんだ」

“それは・・・”と言いかけたところで玄関のチャイムが鳴った。彼女は素早く身を隠した。

誰だろうと思いドアを開けると、そこには今井由紀が立っていた。靖は不自然にならないようにドアから外へ出て挨拶をして背中でドアを閉めた。

「ゴメンナサイね。突然お邪魔しちゃって」と軽く頭を下げながら言った。

「いえいえ、とんでもない。今日はどんな用事ですか」と、平静を装った。

「あ、無事に帰られたようなのでちょっと寄ってみたくなって・・・」

「その件ですか。そうですよね、その件ですよね。お騒がせしたようで・・・」

「でもまだここに住んでいらしたんですね。占いの館で大分お稼ぎになってるようなので大きなマンションにでも越されたかと思ってました。」

「いえ、ここに居るほうがマスコミには盲点のようで気楽なんです。それに何故か尾行されても途中で皆さん居なくなってしまうんですよ」と、靖も不思議なのでつい喋った。

「変ですね、それは。週刊誌の記者ともあろうものが。１人や2人じゃあないのに・・・」

「あなただけですよ、ここが立青の自宅だって知ってるのは。何か縁でもあるのでしょう」

「なにか岡島さんにそう言われるとそんな気になってしまいそうで。占いの館の時“赤の他人じゃあない”みたいな事を言われても抵抗を感じなかって不思議でした」

「なにかここにと言うか自分にバリアでもあるのでしょうか、あなただけが入ってこられるような」

「不思議な言い回しですね。でももっと不思議なのはそれを素直に受け入れてる自分がいる事です」

「あ、どうも変な事を言っちゃってごめんなさい。つい気持ちを誘導してしまうような事を言って・・・」

「岡島さん、いえ立青さんにはやはり何かの力が働いているみたいですね。最初、変な投書をくれた人と言うイメージでしたが、側にいると引力のようなものがありますね」

「ありがとう、いつか時期がくれば由紀さんとは強い縁で繋がって来るかも知れません」

「その言葉って個人的な見解ですか、それとも立青さんの占いですか？」

「いえ、僕は一人ですから。それと言い訳はしませんが、立ち話ですませて中に入れないのも紳士的にしてる訳じゃあないので・・・、今は説明できませんが時期が来たら話せると思います」

「つまり、中に秘密があるって事ですね。わかりました、もう一つのバリアがあるのですね。いつの日か私だけが通り抜けて岡島さんを理解する時が来るのを楽しみにしてます」

帰りがけ、由紀は不思議な感情に包まれていた。暖かなベールで優しく2人が繋がっているような感じを受けていた。何か恋の魔法にでもかかっているのかとすら思った。一度占いの館に行ったのと、玄関先での立ち話をこれで二度しただけなのに・・・。何なのだろう。自分の性格柄好奇心から靖さんに興味があると言うだけではない。何故か引かれてるのは打ち消しよう無かった。彼の意味深な言葉に操られてしまってるのだろうか。それとも部屋の中の秘密と関係があるのだろうか。